

## **求める者には与えなさい**

マタイの福音書 5章 38-42節

### **はじめに**

私がウェルカム・サンデーで説教をさせていただく時には、マタイの福音書 5-7章に書かれているイエス様の説教からお話することになっています。この説教は、山の上で語られたので「山上の説教」と呼ばれています。

今日の聖書箇所ではイエス様は、「**目には目を、歯には歯を**」という律法について教えています。この「目には目を、歯には歯を」という言葉は有名で、クリスチャンではない人にも知られています。この言葉は、旧約聖書の律法の中に書かれていて、レビ記（24：19）、出エジプト記（21：22-25）、申命記（19：15-21）の中に出てきます。

### **1. 目には目を、歯には歯を**

イエス様は 38-39節でこう言われます。「『**目には目を、歯には歯を**』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません」。

この「目には目を、歯には歯を」という律法は、「同害復讐法」と呼ばれていて、被害者が受けた「害」と同じだけの「害」を、加害者にも要求するという公的な裁判の原則です。というのは、誰かに被害を与えたにも関わらず、加害者が償いをしようとしなかった場合があるからです。その場合、加害者に被害を与えたのと同等のもので償うことを要求するために「目には目を、歯には歯を」という律法があるのです。逆に、被害を与えられた被害者が、自分の怒りに任せて必要以上に復讐する場合があります。例えば、目に被害を与えられたのに加害者の命まで奪おうとする、また歯を折られたのに加害者の腕や足までも折ろうとする、そういう行き過ぎた復讐を防ぐために、「目には目を、歯には歯を」という律法があるのです。つまりこの律法は、被害者と加害者を守るための公的な裁判における律法なのです。

しかし当時の人々は、この律法を個人的な復讐を正当化するために用いていたのです。やられたならやり返していい、仕返しや復讐は律法によって正当に認められていると考えて、公的な裁判の時ではなく、個人的な生活の中で仕返しや復讐を行っていたのです。これは明らかに誤解です。旧約聖書は決して、仕返しや復讐を正当化していません。箴言 24：29には、こういう言葉があります。「『**彼が私にしたように、私も彼にしよう。彼の行いに応じて、仕返ししよう**』と言ってはならない」。

「目には目を、歯には歯を」という律法は、加害者にはしっかりと償いをさせ、被害者

には行き過ぎた復讐をさせないための律法です。決して仕返しや復讐を正当化するための律法ではありません。

## 2. イエスの教え

私たちは誰でも、被害を受けたならば、加害者にも痛い目を見させてやりたい、仕返しをしたい、復讐したいという思いが湧いてしまいます。自分だけが苦しいのはおかしい、加害者も苦しむべきだと考えてしまいます。

しかしイエス様は、39 節でこう言われます。「**悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい**」。イエス様は、たとえ殴られても決して殴り返してはいけないと言われるのです。当時の人々は、仕返しや復讐は律法によって正当に認められていると考えて、個人的な生活の中で仕返しや復讐を行っていました。しかしイエス様は、「目には目を、歯には歯を」という律法は決して、個人的な仕返しや復讐を正当化するものではない、むしろ仕返しや復讐は一切してはならないと言われるのです。

40 節には、「**あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい**」とあります。ここでの上着はコートのようなもので、下着はコートの下に着る普通の洋服です。借金が返済できずに訴えられた時、洋服が差し押さえられます。しかし律法では、「上着」は取ってはならないことになっていました。イスラエルでは、朝晩は冷え込み、貧しい人たちは「上着」を布団のようにかけて寝ていました。「上着」がなければ、貧しい人たちは夜を越せません。貧しい人たちから「上着」を取れば、凍え死んでしまいます。その意味で、どんなに貧しい人たちでも「上着」は決して取ってはならなかったのです。しかしイエス様は、「下着」を取られるなら、「上着」も与えなさいと言われます。つまり抵抗せずに、「命」まで与えなさいと言われるのです。

41 節には、「**あなたに一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい**」とあります。当時のイスラエルは、ローマ帝国に支配されていました。そのため人々は、ローマ帝国の兵隊などに、突然荷物を運ばされることもあったようです。一ミリオンは 1.5km です。イエス様はここでも、たとえ理不尽に荷物を背負わされることがあっても、決して反抗せずに引き受け、むしろ倍の 3km を運びなさいと言われます。

イエス様の教えは、ただ単に仕返しや復讐をしてはいけないというものではありませんでした。むしろ求められている以上のことをするようにと言われます。「右の頬」を求められたら、「左の頬」を。「下着」を求められたら「上着」を。「一ミリオン」求められたら、「二ミリオン」を、というものです。

イエス様は、「**あなたがたは地の塩です**」(マタイ 5:13)「**世の光です**」(マタイ 5:14)。「**あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです**」(マタイ 5:16)と言われました。私たちにとっての「良い行い」というのは、仕返しや復讐をすることではありません。むしろ仕返しや復讐をせずに、求められている以上のことを相手にすることです。それこそが、「父があがめられ

るよう」な「良い行い」です。それこそが、「地の塩」「世の光」として生きることです。

使徒パウロもこのように言っています。「**だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人が良いと思うことを行なうように心がけなさい。自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。『復讐はわたしのもの。わたしが報復する』**主はそう言われます。次のようにも書かれています。『もしあなたの敵が飢えているなら食べさせ、渴いているなら飲ませよ。なぜなら、こうしてあなたは彼の頭上に燃える炭火を積むことになるからだ』。悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい」(ローマ 12:21)。

私たちは自分で復讐してはならないのです。神様の怒り、神様の報復に任せなければなりません。また神様は、国家的為政者を立てて「剣の権能」を与えて、悪を罰せられます。私たちは決して自分の手で復讐してはならないのです。私たちは神様の裁きに委ね、神様が立てた国家的為政者の「剣の権能」に委ねなければならないのです。

悪に対して悪で返す時、私たちは悪に負けることになります。悪に対して善で返す時、私たちは悪に打ち勝つことになるのです。

### 3. イエスの模範

イエス様は、この言葉の通りに生きられた方です。I ペテロ 2:19-25 には、こうあります。「**もしだれかが不当な苦しみを受けながら、神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒された。あなたがたは羊のようにさまよっていた。しかし今や、自分のたましいの牧者であり、監督者である方のもとに帰った」。**

イエス様は特に十字架において、「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった」のです。不当な苦しみの中でも、自分で復讐せずに、神様にお任せになったのです。

それは、私たちの罪を負うため、私たちが罪を離れ、義のために生きるため、私たちが癒すためでした。そして、私たちがその足跡に従うために、模範を残すためでした。イエス様は、私たちが救うため、また私たちが「地の塩」「世の光」とするために、十字架の苦しみをひたすら耐え忍ばれたのです。

イエス様は、悪い者に手向かう方ではありません。「右の頬を打つ者には左の頬も向ける」方です。イエス様は、私たちがたとえイエス様に怒りをぶつけたとしても、それを受

け止めてくださる方です。私たちの人生には、「神様どうして」「あなたが私たちを愛して下さっているはずなのに、どうしてこんなことが起こるのですか」ということがしばしばあります。突然の事故や病気、災害、人生の挫折や家族の問題など様々です。その時に私たちは、神様の御心が分からなくなります。その時の私たちの祈りは、怒りや叫びのようなものでもあります。しかしイエス様は、私たちのそのような祈りを受け止めてくださるのではないのでしょうか。「右の頬」で受け止め、「左の頬」でも受け止めてくださるのではないのでしょうか。

イエス様は、「下着」だけでなく、「上着」をも与えてくださる方です。イエス様は、私たちのために「命」まで与えてくださる方です。イエス様は、御自身のすべてを私たちに与えてくださる方です。42節には、「**求める者には与えなさい。借りようとする者に背を向けてはいけません**」とあります。イエス様は、私たちが求めるなら喜んで与えてくださる方です。私たちが不足している何かがあるなら、決して背を向けずに喜んで与えてくださる方です。ですからイエス様はこう言われました。「**求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます**」(マタイ7:7-8)。

またイエス様は「一ミリオン」荷物を背負って行くようにと強いられたら、「一緒に二ミリオン」行ってくださる方です。イエス様は、私たちの人生の重荷を共に背負ってくださる方です。「一ミリオン」だけでなく「二ミリオン」までも、いつまでも私たちの重荷を背負い共に歩んでくださいます。ですからイエス様はこう言われました。「**すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです**」(マタイ11:28-30)。

## おわりに

イエス様は、私たちが御自身の足跡に従って「地の塩」「世の光」として生きるために、十字架において模範を残されました。そしてそれは同時に、私たちを罪から救うためでもありました。イエス様は、私たちのために不当な苦しみに耐えられ、ご自身で復讐せずに神様にすべてを任せられたのです。イエス様は、私たちのために苦しみを耐えられたのなら、今度は私たちがイエス様のために苦しみに耐える番です。

私たちは悪に対して悪で報いるのではなく、悪に対して善で報いていくのです。それこそ悪に打ち勝つ道であり、私たちクリスチャンは、そのためにこそ「召された」とペテロは言っています。悪に対して善で報いて、悪に打ち勝っていく。それこそ「地の塩」「世の光」として生きる道であり、それこそ「神様があがめられる」「良い行い」なのです。

イエス様は私たちのために苦しみに耐えてくださいました。今度は私たちがイエス様のために苦しみに耐えていきましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは罪深く、あなたの律法や御言葉を自分の都合の良いように解釈し、自分を正当化するために用いる過ちを犯しやすい者です。私たちは、イエス様の足跡に従って歩むことができますように。あなたが私たちを救い、生かすために、すべての苦しみを耐え忍んでくださったように、私たちもあなたのために苦しみを耐え忍び、「地の塩」「世の光」として生きることができますように。そして私たちの行いを通して、神様をあがめる人が起こされますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。